

特集

熊本市市民病院長就任のご挨拶

熊本市市民病院長
高田 明

高田 明

平成二十五年四月より熊本市病院事業管理者兼熊本市市民病院長を拝命いたしました。

当院は、昭和二十一年の熊本市立民生病院（病床数七六床）として創立されて以来六十数年、地域の基幹病院として高度医療・救急医療を担い、現在では三三診療科を有する総合病院として発展してまいりました。

当院は自治体病院としての役割を果たしながら、四つの重点医療として、「周産期母子医療」、「がん医療」、「生活習慣病医療」、「救急医療」に取り組んでまいりました。平成十六年三月に総合周産期母子医療センター、平成十七年一月には地域がん診療連携拠点病院に指定されました。平成二十四年十月にはこれまでの地域医療を支援してきた実績が認められ「地域医療支援病院」の承認を受け、地域医療機関との連携を一層密接に行っています。新生児医療については新生児医療センター四二床（NICU一八床を含む）を設け、特に県内の超早産児と心疾患、新生児外科疾患、脳外科疾患などの治療が必要な重症の新生児の治療を行っています。また第一類感染症二床、第二

類感染症一〇床の第一種感染症指定医療機関の指定を受けています。

熊本市は平成二十四年四月に政令指定都市となり、十年後の熊本市の医療を見据えた「くまもと医療都市二〇一二グラウンドデザイン」が策定されました。その中に市民病院の今後のあり方として、急性期拠点病院として、かつ地域の基幹病院としての機能強化、在宅医療の推進が求められています。当院の医療機関としての機能の明確化と連携の強化を図りながら、今まで以上に地域のみなさんから信頼される病院づくりに努めてまいります。

市議会でも『市民病院は現地での建て替えが妥当』とする結論が得られました。

そのなかで新病院が担うべき診療機能のあり方、経営計画等を検討し、『熊本市市民病院新病院基本計画』を策定いたしました。その基本方針として、(1)自治体病院としての政策医療の維持・強化 (2)熊本医療圏における急性期病院としての機能強化 (3)地域の医療機関との連携強化を定めたところです。平成二十五年度に基本設計が完了し、今年度は実施設計に取り組んでいます。平成二十七年より建設工事に入る計画で、新病院のグラウンドオープンは平成三十三年の予定です。平成二十六年の末には公立病院改革ガイドラインが策定されます。自治体病院としての使命を果たしながら今後も地域医療への貢献を行って参ります。当院は「健康を願う市民を支援するため市民と協力し仁愛と奉仕の心をこめて最善の医療を行います」という理念を掲げております。患者中心の思いやりのある医療の実践にむけ職員一同、鋭意努力してまいりますので、今後とも、皆様の変わらぬご支援とご協力を心よりお願いいたします。

熊本大学大学院腎臓内科学教授
— 新しい腎臓内科学を目指して —

授就任のご挨拶

大学院生命科学研究所
腎臓内科学分野教授
向山 政志

向山 政志

平成二十六年四月一日付けで腎臓内科学教授に就任いたしました向山政志です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私は、昭和五十八年に京都大学を卒業、京都大学第二内科大学院（井村裕夫教授）で学位を取った後、米国スタンフォード大学に三年間留学、その後再び京都大学に戻り、高血圧・腎臓内科の領域で研究と診療を行ってまいりました。専門は循環調節ホルモンからみた腎臓病の病態解明をテーマとし、これまでBNPの役割やレニン・アンジオテンシン系の意義を解明するとともに、蛋白尿発症のメカニズムや糖尿病性腎症進展機序の研究を行ってきました。この度、縁あって熊本大学にお世話になることとなり、大変光栄に思います。これまでの教室の伝統を重んじつつ、研究・診療において新たな海へと漕ぎ出すべく、教室員の皆とともに気持ちを引き締めています。今回の船出に際し、腎臓内科同門会をはじめ、肥後医育振興会の先生方の温かいご支援を賜り、改めて感謝いたします。

本学腎臓内科学教室は、昭和五十五年第三内科（佐藤辰男教授）腎臓グループとして発足、江藤賢治先生、中山真人先生らにより基礎が固められました。平成六年に富田公夫教授が着任され、腎臓病の診療・教育および研究が一層充実し、

現体制のほぼ全てができ上がりました。その後、平成十六年から大学院医学薬学研究部・腎臓内科学分野に、さらに平成二十二年からは大学院生命科学研究所・腎臓内科学分野に名称変更され、現在に至っています。

慢性腎臓病（CKD）の概念が提唱されてから十年以上が過ぎ、今やわが国および世界各国で「国民病」としての地位を確立しました。とくに、CKDが独立した心血管病リスクであることが認識されるに至り、多くの対策がなされていますが、患者数は一向に減りません。その発症・進展の基盤にメタボリック症候群の病態が深く関与することが、理由のひとつと考えられます。もうひとつは、最近注目される急性腎障害（AKI）からの移行です。特に、がんや移植医療、救急医療に伴うAKI発症は無視できず、重要な介入領域と考えられます。一方、基礎医学ではiPS細胞に代表される幹細胞研究が隆盛を極めており、腎臓病の分野でも多くの優れた知見が発信されています。そこで、今後の十年間を腎臓内科学の「new decade」と位置づけ、腎臓病の発症・進展の病態解明、新規治療法開発に邁進したいと考えます。スローガンとして、①新たな腎臓内科学の探求、②病態に根差した腎臓内科診療の追求、③幅広い腎臓内科診療の展開、の三つを掲げ、教室員とともに尽力する所存です。

腎臓内科学の臨床は、一次性（腎炎・ネフローゼ症候群）、二次性（糖尿病・高血圧・膠原病など）の腎臓病から、腎不全・透析医療、はては高血圧・電解質異常の診療全てを含む極めて多彩な領域であり、内科学全般に及ぶと言っても過言ではありません。医学教育では特にこの点を重視しながら、広い視野に立った指導を行いたいと考えます。教室はこれ